

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院での研修を終えて

岐阜大学腫瘍外科

徳丸 剛久

この度、平成29年度日本臨床外科学会国内外科研修プロジェクトにて、がん研有明病院で、平成29年8月28日から9月10日までの2週間にわたり研修をさせていただきました、岐阜大学腫瘍外科の徳丸剛久と申します。

最初にこのような貴重な機会をいただきました日本臨床外科学会の国内外科研修委員会高山忠利委員長、私を推薦していただきました当科吉田和弘教授、そして研修を快く受諾いただきました山口俊晴病院長、佐野武副院長兼消化器部長、比企直樹胃外科部長、上野雅資大腸外科部長を始めとしたがん研有明病院の全てのスタッフの方々はこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

卒後10年目の節目の年になり、今後の自身の専門分野の決定について、悩んでいる状況で、この度日本臨床外科学会の国内外科研修制度のお話をいただきました。岐阜県内のみ医療（手術）を経験していなかったため、年間消化器外科領域のみでも2,000例以上手術（食道：100例以上：胃：700例以上、大腸：700例以上）を施行している日本最大のHigh Volume Centerであるがん研有明病院を見学したいと思い、同院を選択いたしました。

今回私は、胃外科と大腸外科を1週間ずつ見学させていただき、手術以外にも、キャンサーボードや消化器外科全体カンファレンス、上部もしくは下部消化管カンファレンス、抄読会などに参加させていただきました。

朝の消化器外科全体のカンファレンスでは、レジデントの先生方が手術報告や術前症例提示をされており、短い限られた時間で、いかに重要な情報を強調して発表するということの重要性を再認識させられた。また、他臓器のグループからの鋭い指摘にも、データを示しながら対応している姿に驚くと同時に、自身のプレゼンテーションの仕方の参考にもなりました。

胃外科に関しまして印象的であったことは、当医局より国内留学し、レジデントとして勤務している安福至先生と佐野先生との術中の会話でした。血管の走行に関して、佐野先生と意見が相違した際に、安福先生は、佐野先生に臆することなく毅然とした態度で、CT画像で確認すると血管走行はこうですと自身の意見をしっかりと述べていました。卒業年度が一年しか相違しない安福先生の振る舞いは、後輩でありながら尊敬の念を感じると同時に、自身の振る舞いを鑑みるいい機会となりました。

大腸外科での研修では、全ての術者に共通して、出血に対する対処法につき自分自身との意識の違いを体感しました。自身の手術では見逃してしまいそうわずかににじむ出血に対しても、すぐに止血対応をしており、術野を出血なく綺麗に保つことへのこだわりに感銘を受けると同時に、自身の未熟さを痛感いたしました。

短い研修期間ではありましたが、今回の国内外科研修を通じて、手術やカンファレンスなどを見学することにより、優れた手術技術やoncologyに対する考え方を体感でき、医局にいただけでは得ることができない知識や貴重な経験を積むことができました。また、それと同時に自身が所属する医局の特性や優れたところを再認識することができた気がします。今回のこの貴重な経験を活かして今後の日常診療に還元していき、岐阜県の医療の発展に貢献していきたいと思っています。

最後に、当研修を経験するためにご協力いただきました当医局の先生方に、誠に僭越ながらこの場を

お借りしてお礼申し上げます，日本臨床外科学会の国内外科研修の報告とさせていただきます．このような貴重な機会をいただきまして，誠にありがとうございました．